

質疑

【すぎのこハウス 佐藤さんへ】

Q: スポーツの余暇活動で市民ボランティアの協力の内容は? (秋田県能代市 佐藤さん)

A: 例えば、エアロビクスをしている方に準備体操の指導をお願いしたり、市民ボランティアの方々と障害のある方々が一緒にプレーをする等、共に汗を流す活動をしている。

【麦の会 若木さんへ】

Q: 公民館の事業(はまなす青年教室)では一般の健常者の方も参加できるか。また、公民館からの支援等はどのような内容か。(秋田県能代市 佐藤さん)

A: 参加募集は知的障害のある方を対象にしているため、健常者の方からの受講はない。公民館からの支援は設備の提供、講師の紹介や私達の希望をきいて一緒にプログラムを組む等。

Q: 将来、障害のある子ども達を対象とした事業を行いたいと考えている。情緒の障害のある方も参加しているとのことだが、どのようなトラブルがあったか、教えていただきたい。

(女川町教育委員会 高清水さん)

Q: 音に敏感な方がいて、特定の人声の高さに興奮し机を叩くということがあった。ずっと接する中でお互いに距離を持つようになり、興奮した時はサポーターの方が一緒に廊下に出てクールダウンする等の対応をしている。

Q: サークル発足当時にはまず自分達でやってみようとお金を持ち寄ってスタートしたと伺い、すごいなと思った。今は行政から支援があるとのことだが、現在の事業の進め方についてもう少し詳しく伺いたい。(秋田県教育庁 長崎さん)

A: 公民館事業で行っている 15 回の講座は公民館の講師リストやサークルからの推薦で講師をしてもらい、講師料は公民館から支払われている。

サークルの自主的活動は補助金があれば利用しながら、それ以外の部分は個人の負担で行っている。ボランティアの方々は全て自己負担。自分の状況に合わせて、出来ることで参加することを基本としている。

【両発表者へ】

Q: 現在、コロナ禍で様々な活動・教室等が中止となっているが、コロナ禍でどんな活動をされているか。(北秋田市教育委員会 石川さん)

A: (麦の会 若木さん) 規制となった時に行政の施設が一番に閉鎖してしまい、困った。10月から解除となり民間活動がスタートしている。自主的活動では密にならないよう対策をしながら市内散策等を行っている。グループホームに入っている人もいるが、解除になるまで訪問や参加ができないという人もいる。皆さんストレスが溜まっていて、自宅だけで子ども達を見るのは大変だということも伝わってくるので、やれる範囲で活動を続けている。

A: (すぎのこハウス 佐藤さん) 今は仕方ないと捉えている。免疫や抵抗力が弱い方もいるので、身の安全を第一に、健康被害が出ないように考えなくてはならない。しかし、ストレスが溜まってしまう状況なので、心は豊かに持てるように、やり方を変え、少人数でやれる活動等工夫をしている。支援者の方はあらゆる知恵を絞りだして、どんな活動なら取り入れられるか、障害のある人も楽しめるか等を模索している。

感想

お二人の話聞き、今後うちの公民館でも取り組んでいくことを考えなければと感じた。

(飯豊町社会教育課 中善寺さん)

助言・講評

【事例の良かったポイント】

○すぎのこハウスの取組みではいろんな人が関わっていて、連携・関りの広がり素晴らしと感じた。ポイントが2つあり、1つ目は直接障害に関わり無くても音楽やスポーツ等自分の得意としたことをとっかかりとした緩やかな繋がり。2つ目は社会教育施設を

利用することによって市民ボランティアとの関わりが増えたという社会教育を通じた繋がり。人と人、団体同士の繋がり施設を通して出来上がったということが素晴らしいと感じた。

○麦の会の取組みについて。はまなす青年教室というのは東北では珍しい障害者青年学級。学校を卒業した障害のある方への社会教育の領域では少ない場であり、50年前から続けてきたというのは相当すごいこと。若木さん達がいたから継続してきたものと思うが、本来であれば教育委員会で継続していくことが求められる。麦の会は青年学級だけでなくサークルとやりたい活動内容を分け両立させてきたということも継続してきた理由なのかと思う。

○共通した良いところについて。2つの事例の活動の意義を考えると「仲間づくり」ではないか。仲間と一緒に同じ時間を過ごし共有することが2つの事例の良いところであり、障害のある人の生涯学習の意義になると感じる。ここでいう仲間とは「一緒に活動する人、経験を共有する人」。すぎのこハウスでも麦の会でも障害のある方がやりたいことを尊重して活動をすると思うが、仲間がいて一緒に楽しむという気遣いがあるので我儘な活動にはならない。仲間づくりには安心できる居場所が必要であり、安心できる居場所のためには人との関係の中でお互い気遣いながら活動に取り組むことが重要となる。活動の中で、一人一人が使命を持ち、そのことに喜びを感じることで主体性に繋がり、自己肯定感、自尊感情が高まっていく。生涯学習を通して、障害がある人とない人が援助する・される関係ではなく、一緒に活動し学び合う関係性が2つの事例には見られる。正に共生の場であり、共に学び合うという意味での共学と言える。

【今後の課題とまとめ】

○ボランティア等の支援する人が増えるにはどうしたらいいか。永遠の課題であり、この場で解決できることではないが提案させていただく。

○2つの事例ではスタッフやボランティアは単に活動を支援する人ではなく、「仲間」になるということ。

○よく行われるのは養成講座を開くこと。2つのパターンが考えられ、1つはボランティアを募集し養成するオードソックスな特化型。2つ目は全く関係のない講座の一環としてボランティアを組み込む相乗り型。うまくいくのではないかと思われるのは相乗り型。音楽やスポーツ等に興味があり、やりたい方達の協力を仰いでいくというやり方。もし関心があれば終了後に団体化、組織化していくという方法も一つの手であり、そこは教育委員会の出番である。

○社会教育全般に共通することだが、「連携」が重要。連携というのは活動とセットと考える。情報交換や意見交換も非常に大事なことはあるが、どうせならもっと楽しいことを一緒に企画してみたらよいということ。一緒に具体的な活動をすることで、より深い連携が図れる。

○発表の中で「リモートでは人と人が繋がっていることが実感できにくい」という発言があったが、まさに、直接いろんな団体、人が繋がって一緒に取り組む中で学びが生まれていく。その学びそのものが連携になっていく。